

第2 言語習得における非対格動詞の受身化について

松 林 城 弘

1. はじめに

動詞を分類する際、文中に目的語が現れる場合は他動詞、現れない場合は自動詞というような区別の仕方をよくする。ところが、目的語の有無だけで両者を区別するには限界がある。例えば、他動詞の中でも、(1a)のように目的語が省略できない場合もあれば、(1b)のように目的語を省略して自動詞のように扱う場合もある。

- (1) a. The news that earthquake destroyed *(the city) surprised *(us).
b. He smokes (cigarettes), but doesn't drink (alcoholic beverages).

同じように自動詞にも幾つかの種類がある。例えば、occur, appear, exist などの「存在・出現」を表すグループと dance, laugh, swim などの「意図的・意志的な行為」を表すグループとでは区別が必要となる。このことは、There 構文の中に各々の自動詞が現れた場合、(2a)は適格となるが、(2b)は不適格となることから窺われる。

- (2) a. There occurred a tragic accident yesterday.
b.*There danced a young girl in the ballroom.

このように、動詞の分類には他動詞と自動詞というグループ化だけでは十分とは言えず、例えば、Perlmutter (1978) の非対格性の仮説 (Unaccusative hypothesis) から、最近の Levin and Rappaport Hovav (1995) の研究のように、より詳しい動詞の分類が提案されてきた。

こうした動詞の分類化と連動するかのように、2 言語習得研究の分野でも、非対格性の仮説等を基にして、学習者の動詞の習得状況を説明する研究が増えてきた。特に、非対格/非能格動詞の習得の際に現れる受身化の誤りに関して、非対格性の仮説等により説明が可能であるとする研究が数多く出てきた。しかしながら、こうした説明の仕方以外にも、受身化の問題を説明する手だてはないであろうか。本稿では以下で、この可能性に関して考察してみたい。

2. 非対格性の仮説

非対格性の仮説では、(2a)のような自動詞を非対格動詞 (unaccusative verb) と呼び、(2b)のような自動詞を非能格動詞 (unergative verb) と呼んで区別している。この区別の前提となっているのは、(3a, b) 文の右横に示された D 構造の違いである。非対格動詞の D 構造は、主語

の位置が空になっており、目的語の位置に NP が存在する。一方、非能格動詞は、もともと主語の位置に NP が存在する。

- (3) a. 非対格動詞: The accident occurred. ___ [VP V NP]
 b. 非能格動詞: The girl danced. NP [VP V]

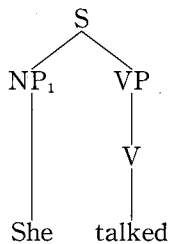
両動詞は、S + V という同じ S 構造を持ちながらも、D 構造から S 構造への派生の仕方が異なるのである。派生の違いをもう少し詳しく見てみると、例えば、非対格動詞を含む (4a) と非能格動詞を含む (4b) は、それぞれ右横に示す D 構造を持っている。

- (4) a. John arrived. [IP [e] [I' I [VP [V' arrive [NP John]]]]].
 b. John worked. [IP John [I' I [VP work]]].

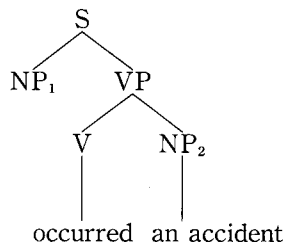
(4a) の John は arrive から θ 役割が付与されるが、格は付与されない。そこで、空 [e] となっている主語の位置へ NP 移動した後に、主格が付与され、(4a) が派生される。一方、(4b) の John はもともと主語の位置で θ 役割と主格が付与され、NP 移動なしに (4b) が派生される。

ここまでの枝分かれ図で整理すると次のようになる。

(5) 非能格自動詞



(6) 非対格自動詞



(5) では、もともと主語 (NP1) が存在するので、NP1 以外の NP を主語の位置に挿入することは出来ない。一方 (6) では、目的語に相当する NP2 だけが存在し、主語の位置は空いているので、例えば、S 構造において主語の位置に There を挿入して There occurred an accident. という表現を生み出したり、NP2 を主語の位置に移動して An accident occurred. といった表現を生み出すことが可能となる。このように、非対格性の仮説は、動詞の主語が D 構造において目的語の位置を占める (非対格) 自動詞が存在し、他方、動詞の主語が D 構造においてもともと主語の位置をしめている (非能格) 自動詞が存在すとして、両者の動詞が統語構造において異なった特性を持っていることを示している。

加えて、非対格性の仮説は、このような統語構造には動詞の意味内容も関連すると仮定し、さらに詳しい分類を試みている。例えば、非対格動詞には動作主を含意する動詞 (break, burn, freeze...) や存在・出現を表す動詞 (appear, occur, exist...) などがグループ分けされており、非能格動詞にも意図的・意志的な動作を表す動詞 (play, work, speak...) や非随意的様態を表す動詞 (cough, sleep, sneeze...) などがあるとされている。非対格性の仮説は、こうした意味的な特性が非対格性/非能格性と深く係わり、最終的に統語構造に具現されると仮定している。

3. 日本人学習者による受身化の誤り

90年代以降、非対格動詞に関する第2言語習得研究も精力的に行われるようになった。最近においては、日英語比較の観点からも一連の研究(Hirakawa 2001, Sorace & Shomura 2001)が行われている。本節では、英語の非対格動詞の習得に関して、特に、受身化の誤りを問題にした先行研究(Zobl 1989, Balcom 1997, Hirakawa 1997)を取り上げ概観する。

Zobl (1989) は、日本語を母語とする英語学習者90名を含む114名の自由英作文の中に、次の(7a, b)のような受身化('be'+en)の誤りが現れることに着目した。

- (7) a. The most memorable experience of my life was happened 15 years ago.
b. Most of people are fallen in love and marry with somebody.

Zobl は、非対格動詞と受身化される動詞の項構造(argument structure)には類似点があると仮定した上で、(7a, b)の受身化の誤りは、非対格性の仮説を支持する証拠として解釈できるとしている。2で概観したように、非対格動詞は[V NP] (i.e. [__ [open the door]]) という項構造を持ち、目的語に相当する内項(internal argument)のみ存在し、主語に相当する外項(external argument)はもともと存在しない。最終的に、内項であるNPが主語の位置に移動し、S構造が生成される。Zobl は、このような項構造からS構造への派生の仕方は受身化される動詞の場合と類似していると見なす一方で、受身化によるNP移動は内項のNPが主語の位置に明示的に移動する統語規則(syntactic rule)であり、非対格動詞のNP移動のような語彙規則(lexical rule)を包摂する核規則(core rule)であると見なしている。これに従って、(7a, b)のような誤りは、非対格動詞の主語は元々目的語の位置にあったという学習者の解釈が、受身化の規則により包摂、或いは、過剰般化された結果生じた誤りではないかと説明されている。結果として、このような誤りは、学習者が非対格動詞の特性に敏感であるという点において、非対格性の仮説を間接的に支持する証拠として提示されている。

Balcom (1997) は、Zobl の提案を基にして、非対格動詞の受身化の誤りについてさらに詳しく調査した。実験では、38名の中国語を母語とする英語学習者に対して、非対格動詞を含む文の文法性判断を求めた。(8a, b)は使用された実験文の一部である。

- (8) a. The riot occurred after the police officers had been acquitted.
b.*The door was closed smoothly because Mary had remembered to oil the hinges.

(8a)は適格文であるが、'was occurred'が妥当だと誤った判断する反応が18%あった。(8b)においては、不適格文であるにもかかわらず37%がこの文を適格であると判断した。この結果によって、(7)で見たような自由英作文に現れる受身化の誤りが、文法性の判断においても反映されることが確認されたが、何故このような誤りが生じるのかといった点に関して、Balcom は Levin and Rappaport Hovav (1995) の理論を用いながら、Zobl の説明をさらに拡張している。

自動詞と他動詞の機能を併せ持つ非対格動詞に関して、Balcom (1997: p.7) は、Levin and Rappaport Hovav が提唱する反他動化(detransitivization)の説を受け入れ、他動詞から自動詞が導かれるとしている。この反他動化の規則は(9)のように定式化されている。

(9) Unaccusative with Transitive Counterpart (e.g. 'break', 'open')

LSR	[[<i>x</i> DO-SOMETHING] CAUSE [<i>y</i> BECOME STATE]]	
	↓	
Lexical binding	ϕ	
Linking rules		↓
AS		< <i>y</i> >

語彙意味的レベル (lexical semantic representation: LSR) において、元々、外項と内項が存在するが、外項は語彙的に束縛され、項構造 (Argument Structure: AS) に派生されない。結果として、内項のみが項構造に残ることになる。要するに、外項にあたる使役主 (Agent) は元々存在はするけれども、それを不特定なものとして伏せておき、内項にあたる対象物 (Theme) だけを残すということである。こうした基底構造から、対象物が主語の位置に移動し、最終的に、S構造における 'The window broke.' のような文が生み出されることになる。

また、自動詞の機能しか持たない非対格動詞に関しても、Balcom (1997: p.7) は、(10)に示す Levin and Rappaport Hovav の規則を受け入れている。

(10) Unaccusative with no Transitive Counterpart (e.g. 'happen', 'fall')

LSR	[<i>y</i> BE/BECOME AT <i>z</i>]	
Linking rules	↓	↓
AS	< <i>y</i> >	P_{loc} < <i>z</i> >

このタイプの非対格動詞は、二つの内項 (つまり、Theme と Location) を持つが、どのレベルにおいても外項を持たない。そのため、対象物 (Theme) と場所 (Location) のみが項構造に残ることになる。最終的に、対象物のみが主語の位置へ移動し、'The accident happened at the intersection.' のような文が生まれる。

Balcom は、(9)(10)の項構造が引き金 ('input for passivization') となって、(7)で見たような受身化の誤りが生じるのではないかとしている。その可能性は(11)の規則により説明されている。

(11) Passive

LSR	[[<i>x</i> DO-SOMETHING] CAUSE [<i>y</i> BECOME STATE]]	
Linking rules	↓	↓
AS	$x \rightarrow \phi$	< <i>y</i> >

外項が束縛され、いわゆる使役主が不特定のものとして伏せられた形となっており、(9)(10)の非対格動詞の項構造と同じように内項だけが残されている。この項構造からS構造への派生の過程で(7)のような使役主を削除した受身化の誤りが生じるのではないかと説明されている。

次に、Hirakawa (1997) の実験の中で明らかになった非対格動詞の受身化の誤りに関する部分に的を絞って概観したい。Hirakawa (1997, p.20) は、まず、(12)に示すように動詞を4つのタイプに分類した。

- (12) Type A : Unaccusative Verbs : break, burn, freeze, grow, melt
 Type B : Unaccusative Verbs : appear, arrive, come, die, fall

Type C : Unergative Verbs : dance, laugh, play, sing, swim

Type D : Transitive Verbs : build, cut, hit, paint, wash

タイプAは、状態の変化を表す動詞 (change of state verbs) で、他動詞の機能を併せ持つ非対格動詞である。タイプBは、内在的移動動詞 (inherently directed motion verbs), 或いは、出現動詞 (verbs of disappearance) で、他動詞の機能を持たない非対格動詞である。タイプCは非能格動詞で、タイプDは他動詞である。実験では、日本語を母語とする大学生18名と英語母語話者10名を対象に、各々のタイプの動詞が(13)に示すような誘導的表出タスク (Elicited Production Task) の中でどのような形で表出されるのか確認された。

(13) Elicited Production Task

John was looking out of the window. Because of a typhoon, it was raining heavily, and the wind was blowing the trees. All of a sudden, one of the trees _____.

(break)

(13)では 'broke' が正しい表出であるが、日本人学習者の反応には、'was broken' という受身化の誤りが多く見られた。'break' に関しては、18の表出の内、11がこのような誤りであった。以下タイプAの動詞に関して、'freeze' は18の内6, 'burn' は18の内5, 'grow' は18の内1が受身化の誤りであった。タイプBの動詞に関しては、全表出数の4.4%がこの種の誤りであり、タイプAの26.6%と比べるとかなり少なかった。一方、タイプCに関しては、受身化の誤りは、一例しか見られなかった。他動詞のタイプDについては、むしろ、自動詞化の誤り (e. g. The bridge built between the two islands.) が全反応の17%を占めていた。勿論、母語話者の表出には、このようなタイプA~Dの誤りは見られなかった。

この結果は、タイプCの非能格自動詞よりもタイプA・Bの非対格自動詞の方が学習者には表出が困難であること、さらに、非対格自動詞の中でも、他動詞の機能を持たないタイプBよりもその機能を併せ持つタイプAの方が表出が特に困難であることを示しており、概ね、タイプC、タイプB、タイプAの順に表出が難しくなることを示唆している。Hirakawa は、特に、非対格自動詞に受身化の誤りが多かった点に関して、非対格性の仮説や θ 役割付与一様性の仮説 (Uniformity of Theta Assignment Hypothesis) (Baker 1988) の予測に合致するものであるとして、それら仮説の有効性を支持している。

4. 受身化の誤りについての再解釈

前節で概観したように、非対格動詞の受身化の誤りは、非対格性の仮説を主な拠り所として説明されてきた。本節では、日英語の視点の置き方の違いという観点から、日本人学習者の受身化の誤りの原因を探ってみたい。その際、特に、Hirakawa の実験結果の中で受身化の誤りが多かった 'break' に焦点をあてて考えてみたい。

(13)で見た刺激文に対する正しい反応は、自動詞の 'broke' であるが、日本人学習者の反応には、'was broken' という受身化の誤りが多く表出された。この誤りの原因の一つとしてまず考えられることは、学習者が 'break' を他動詞と認識していたということである。Tomita (2000) は、日本人大学生104名を対象に、24種類の動詞の自動性/他動性に関する文法性判断を求めたが、

その結果の内、'break' に関しては(14)に示すように、学習者は他動詞として認識していることが窺われる。

(14) break

- a: Jane broke the vase. <VT> 92.71% (Correct Judgement Rate)
 b. The vase broke easily <VI> 9.38% (Correct Judgement Rate)

もし Hirakawa の被験者にも、'break' は他動詞であり、自動詞ではないという認識があれば、(13)の刺激文に対する反応は、'was broken' しか選択肢はなく、受身化の誤りが必然的に生じることになる。田中 (1987) は、'break' のコアを「ある活動、過程、状態に外的な力を加えること」と定義しているが、まさしく学習者の受身化の反応は、「外的力を加える」という側面に焦点をあてた反応、つまり、受身文の by-phrase 以下で表される外的力を省略した形での反応であると言える。

次に、学習者が 'break' を自動詞として認識できない原因の一端を、動詞の意味構造における反使役化(anti-causativization)という考え方を基にして考えてみたい。影山(2001)は、'break' のような他動詞と自動詞の用法を併せ持つ非対格動詞の意味構造を(15)のように表し、さらに、他動詞から自動詞への反使役化を(16)のように表している。

(15) <x が活動> → <y が変化> → <y が状態>

- ① x と y が異なる場合は、他動詞 (X broke Y.) になる。
 ② x と y が同じ物と見なされると、自動詞 (Y broke.) になる。

(16) <x の活動> → <y が変化> → <y の状態>

↓

x=y (つまり、y 自体の活動によって y が変化状態になる)

(16)が示すように、反使役化とは、行為者(x)を変化対象(y)と同定することであり、これにより変化対象(y)が他力ではなく、自力で変化することを意味する。この考え方を基にすれば、学習者が 'break' を自動詞として使用できないのは、行為者(x)を変化対象(y)と同一視できないことにより、変化対象(y)が自らの力で変化状態になるという認識が欠如していることが原因ではないかと考えられる。具体的に言うと、(13)の刺激文において、'the wind was blowing trees... one of the trees broke.' という自動詞文が表出できないのは、「台風による風が吹いていたという外的な力」が間接的に影響して、「(木が激しく揺れることにより)木が(自らの力で)折れた (=one of the trees broke.)」という最終的な変化状態に至るまでの「木の内在的な力」に対する認識が欠けていたことが原因であると考えられる。

本節ではここまで、学習者は、'break' を他動詞として認識している可能性があること、さらに自動詞として認識できない理由を反使役化の考え方に基づいて述べてきた。それでは何故、日本人学習者は、'break' を他動詞として認識し、反使役化による自動詞として認識しにくいのであろうか。この問題について以下で考えてみたい。

影山(1996)は、「英語の基本は上位事象から下位事象を見つめる視点であり、日本語の視点は逆に下位事象から上位事象を眺める視点である」と述べ、英語は結果重視の視点であり、日本語は過程重視の視点であるとしている。例えば、英語の結果重視の視点が最も顕著に現れる

のは結果構文であるとして、(17)のような例が挙げられている。

(17) John kicked the door open :

上位事象 -----> 下位事象
John kicked the door the door became open

行為者の働きかけ（上位事象）から行為の結果状態（下位事象）へと視点が向けられ、最終的に結果の状態に重点が置かれる。一方、日本語には「燃やしても燃えない」式の表現があり、このような表現は、結果状態は視野から外れ、働きかけ（上位事象）に注意が注がれた過程重視の表現であると指摘されている。

視点の行き着く先が、下位事象か上位事象かによって言語間の違いが生じるという捉え方は、何故、日本人学習者は、‘break’を他動詞として認識し、反使役化による自動詞として認識しにくいのであろうか、という問題に繋がっているように思われる。この問題を考えるに際して、今一度、Hirakawa の実験文(13)を引用しておく。

(18) Elicited Production Task

John was looking out of the window. Because of a typhoon, it was raining heavily, and the wind was blowing the trees. All of a sudden, one of the trees _____.
(break)

この刺激文は、‘a typhoon’ → ‘the wind was blowing the trees’ → ‘one of the trees (break)’の順に事態が展開している。先程の下位事象と上位事象のどちらに認知的な焦点があてられるかという議論は、あくまで文レベルにおける事態の展開に限定されていたが、これを談話レベルの事態の展開に拡大適用してみると、(19)のようになる。

(19) 英語： 上位事象 -----> 下位事象
日本語： 上位事象 <----- 下位事象
 the wind was blowing the trees one of the trees (break)

英語的な処理をすると、上位事象から下位事象を眺めることになり、最終的な到達点に行き着く。つまり、「木が折れた」という結果状態に目が向けられ、(20a)が示すような英語が表出されることになる。一方、日本語的な処理をすると、結果状態よりもむしろ「風が木に吹き付けていた」という外的な力を視野に入れながら、到達点に行き着くまでの過程に目が向けられることになる。この過程重視の処理をすると、(20b)のような、by-phrase 以下の外的な力を想定した受身文が表出されることになる。

- (20) a. 英語的処理：One of the trees broke.
 b. 日本語的処理：One of the trees was broken (by the wind).

日本人学習者が(20b)のような過程重視の英文を表出するということは、日本語からの一種の転移(transfer)によるものであるが、単なる日本語そのものの転移ではなく、視点の置き方という認知的な転移を反映した結果によるものと考えられる。

本節では、ここまで Hirakawa の実験結果の中で受身化の誤りが多かった 'break' に焦点をあてて、日英語の視点の置き方の違いという観点から、日本人学習者の受身化の誤りの原因を探ってみた。前節で概観したように、非対格動詞の受身化の誤りは、非対格性の仮説等を主な拠り所として説明されてきた。本稿は、そうした統語的・意味的な説明の仕方を否定するものではないが、少なくとも、今回取り上げたような日英語の視点の置き方の違いという認知的な観点からの説明の仕方も有効ではないかということを最後に提案しておきたい。

5. おわりに

本稿では、英語の結果重視と日本語の過程重視という視点の置き方の違いが、日本人学習者による非対格動詞の受身化の誤りに繋がると考えてきた。影山 (1996) も指摘するように、結果重視と過程重視の対立は、日常的な文化や行動様式にも影響を及ぼすことがある。例えば、日本語で手紙等を書く場合、経過を説明した後に結論に入るが、英語では、結果や結論から先に述べることが多い。このように、結果重視指向と過程重視指向の対立が日常生活にも反映していると考えれば、当然、日英語の言語表現にも影響を与えることになる。さらに言えば、日本語を母語とする英語学習者は、日本語の過程重視指向の視点の置き方を英語表現に持ち込む、或いは、転移することが十分にあり得る。繰り返しになるが、こうした幅広い認知的な観点から、非対格動詞の受身化の誤りの問題を捉える研究が今後増えてくることが期待される。

参 考 文 献

- Baker, M. 1988. *Incorporation : A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Balcom, P. 1997. Why is this Happened? Passive Morphology and Unaccusativity. *Second Language Research* 13.1, 1-9.
- Hirakawa, M. 1997. On the Unaccusative/Unergative Distinction in SLA. *Jacet Bulletin* 29, 17-27.
- Hirakawa, M. 2001. L2 Acquisition of Japanese Unaccusative Verbs. *Second Language Research* 23. 2, 221-45.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』くろしお出版.
- 影山太郎. 2001. 『動詞の意味と構文』大修館書店.
- Levin, B. and Rappaport Hovav, M. 1995. *Unaccusativity : at the Syntax-lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Perlmutter, D. 1978. Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis. *Proceedings of the Berkeley Linguistics Society* 4, 157-89.
- Sorace, A and Shomura Y. 2001. Lexical Constraints on the Acquisition of Split Intransitivity : Evidence from L2 Japanese. *Second Language Research* 23. 2, 248-78.
- 田中茂範. 1987. 『基本動詞の意味論コアとプロトタイプ』三友社出版.
- Zobl, H. 1989. Canonical Typological Structures and Ergativity in English L2 Acquisition. Eds. S. Gass and J. Schachter. *Linguistic Perspectives on Second Language Acquisition*. Cambridge University Press.